

著者プロフィール

田中俊光（たなか・としみつ） 1979年東京都生まれ。2002年、日本大学生物資源科学部卒業。大手住宅メーカーのグループ会社で外構造園専門部門に勤務し、転職後は造園・外構に加え住宅のプランニングも手掛ける。2013年3月に独立し株式会社ナインスケッチを設立。雑木の庭をはじめ、エクステリア・外構のプランニング・施工管理に携わる。主な受賞歴：2011年、「ユニゾン フォトコンテスト2011」ファサードガーデン部門ゴールド賞受賞、2014年、「浜名湖花博庭園コンテスト」浜松市長賞受賞、2014年「第2回ブロックガレージデザインコンペ」入賞、2017年、三協アルミ「エクステリアデザインコンテスト2017」ファサード部門 ゴールド賞受賞。資格：一級造園施工管理技士、一級土木施工管理技士、エクステリアプランナー1級、二級建築士。



軽井沢の雑木林

色鮮やかで、ふわふわとした軟らかく心地よい雑木林。この状態を作っているのは、幹だけ写っている高木（右側の太い木。枝葉は写真のさらに上部にあります）のおかげです。この高木が強い陽射しを遮ってくれ、中低木に優しい木漏れ日を注いでくれるのです。また、高木にとってこの中低木は、幹や根元付近に強い光や風を遮ってくれる役割があります。お互い相互作用をもたらしながら助け合いながら生息しているのがわかります。



浜松市東区の雑木の庭

これを一般住宅の庭で適用したのが、「雑木の庭」なのです。最近ではアオダモなどが人気樹種として扱われることが多いですが、これも一

自然に近づける植栽

私は今、「雑木の庭」と「地形を活かす外構デザイン」という2つのコンセプトを軸にして、庭や外構の提案をさせていただいています。

このコンセプトは、住まいを「外」から考えることを大切に、自然を感じる心豊かな暮らしを追求しているということなのです。

特に緑の力を活かした外回りから考える住まいや、空間を建築ではなく外構や造園の立場から提案していきたいと思っ

て仕事に取り組んでおります。

その中で大切にしているのは、緑の力で心地よい住まいを作るには、人目線庭をつくり込むのではなく、自然に近づける植栽が必要だということです。

そのためには、自然の山はどうなっているのかを学び、樹種の組み合わせや配置などを決めていく必要があります。お施主様が「この木が欲しい」と要望しても、簡単に植えてはいけません。植えたいのなら、その木が本来生息できる環境を作ることが求められます。

例えば、自然には「植生遷移」というメカニズムがあります。大まかに言うと、山火事などで植物が消失した場合、最初に草本類が生えます。その後、落葉高木が生え、その下に常緑樹が生息してくるのです。いずれは常緑樹主体の極相林へと遷移していく訳ですが、人が心地よいと感じるのは、落葉高木が主体の山だと思います。軽井沢などがそのような山ですね。心地よい空間を作ろうと思えば、

こうした植生メカニズムに習えばいいのです。

階層的な混植、密植が必要

山の木々を見ると、高木、中木、低木と階層的に生息していることがわかります。木が一本で生息している環境はありません。高木にとっての中低木は、幹や根元に強い陽射しや風が当たらないように遮ってくれる存在です。また中低木にとっての高木は、強い直射日光を遮り木漏れ日を作ってくれる存在です。中低木は強い直射日光を浴びると傷む樹種が多いのです。このように山の木々はお互いの役割があり、助け合いながら生息しているのがわかります。

これは一般住宅の庭でも同様で、木々にとっては自然の山よりも過酷な環境と言える住宅の庭だからこそ、1本単位ではなく、階層的に混植、密植する植栽が必要になってくるのです。

新連載 大地の再生

造園家 田中俊光(株)ナインスケッチ代表)



大地には水と空気が流れている。 そして動植物と同様に呼吸をしている

本で植えると最初は良いのですが、2、3年すると痛んでしまうケースが多いですね。そういう植栽のやり方を避けて、階層的に混植、密植していけば、木々が健康に生息してくれます。木々が健康になれば自ずと我々人にも心地よい環境を提供してくれるのです。

地上よりも「地下が大切」

さて、ここからが本題となります。このように自然から学び、自然に近づけた「雑木の庭」を作っても、なかなか木々が元気に育たない時がありました。どうしてなのか悩み、色々な試行錯誤をしていた時に、矢野智徳さん（造園家・環境再生士）が主宰する「大地の再生講座」というものに出会ったのです。

その講座で私はかなりのショックを受けました。というのは、私は植栽をするにあたって、地上の樹種の組み合わせの



グライ土
土中に水や空気が滞ると酸欠状態になり、青みがかった灰色のヘドロのような土になってくる。有機ガスを発生させ匂いを嗅ぐと臭い

ことばかりを考えていたのです。それが矢野さんによると、**もっとも大切なのは「目に見える地上よりも地下にある」ということ**だったのです。

私は改めて、植栽をするにあたっては、その土地のこと、表層地質、土壌、地形などの大地のことや、水や空気の対流のことなどを考慮する必要があることを学びました。同時にそれは植栽だけでなく、もっと一般的な住まいづくり、まちづくりといった景観の観点からも大切な概念であるということに気づかされたのです。

酸欠「グライ土」の危険

私が仕事をして来た中で、今までになかった視点は、「**大地の中には空気が流れている**」ということでした。

大地の中には、水だけでなく空気がしっかりと流れているということです。

雨が降れば大地に浸み込み、地形の落差によって谷へ水が湧き出てきます。それは大気圧がかかり空気圧が動くことで、押し出されるように水圧が動き、谷へ水がどんどん湧き出てくるとも言えます。

す。

山の谷間から朝、霧や靄が現れるのは、谷間に集まった水と空気が夜間に貯えられ、朝になって地上に上がってくるからです。そのことから、大地の中で対流するのは水だけでなく空気も一緒だということがわかります。

したがって水が滞れば、空気も滞りません。空気が滞れば、土中は酸欠状態になり、土は青みがかってヘドロ化した「グライ土」に変わってきます。大地も生きています。大地も他の動植物と同じで呼吸しているのです。

グライ土では微生物や小動物などは生息できません。ましてや樹々はその根を伸ばすこともできません。微生物や小動物は団粒構造の土をつくってくれる担い手なのに、こういう大地では生息できないのです。樹木の根は水と空気を流す媒体ともなってくれるのに、伸ばすことができないければ、そこは負の連鎖に基づいた死の世界です。

ここを改善せずに植栽をしていても、樹々が健康に生息できるはずがなかったのです。

いま、こうした状況が全国どこに行っても起こっているのです。この土中の空気の流れの視点を欠いた空間づくりが大地を傷め、動植物が生息しづらい環境を作ってしまったのです。今、大地は悲鳴をあげているのです。

今月より、「大地の再生」連載を開始します。執筆者の静岡県浜松市の造園家・田中俊光さんは、長い間、造園・エクステリアと建築、まちづくりの融合を考えた「空間づくり」を実践してきた方です。田中さんの作る「雑木の庭」は、単に鑑賞する場所ではありません。その場にいて、不思議と「人を快適にさせる」空間でもあります。

しかし、中には、どうしても植栽が枯れてしまう場所もあります。どうしてなのか？一田中さんは現状に満足しませんでした。その中で「大地の再生」という考え方に会いました。そして探求を続けていくうちに、日本の住宅のほとんどが、雑木が枯れてしまう酸欠の土壌になっているのでは？という疑問を抱くようになりました。

果たして、現在の住宅業界、そして造園・エクステリア業界に、そうしたメッセージが受け入れられるのか。少しでも快適空間の創造に貢献できる業界にしていければという思いで、新しく連載を引き受けて頂きました。ぜひとも、この連載を通じて、これからの日本の国土のあり方について、造園・エクステリアの観点から貢献出来ることを一緒に考えて頂ければ嬉しいです。